The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新撰和歌の歌の排列について
Author(s)	今井, 優
Citation	語文. 1954, 12, p. 34-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新撰和歌の歌の排列について

今井　優

新撰和歌は、紀貫之の撰といはれる。しかし、近来はそれを疑ふ説も出てゐる。つまり新撰和歌の成立については、いろいろと問題があるのである。私は、それらの問題解明の一助にもと、自分の調査ノートから、新撰和歌の排列上の特殊性に関する部分をここに抄録しておく。

まづ、新撰和歌は三百六十首から出来上つてゐるが、これは、田氏家集の「貞観元年春年調三百六十首ヲ献ズ」や曽丹集の毎月集（一名三百六十首歌）と同系列のもので、もと漢詩の方ではじまつたものを和歌にも応用したもので、陰陽術数の宇宙論的思想から出てゐると見られるのである。

次に、その歌の排列は、春秋、夏冬、恋雑といふ風にすべて対偶させてあるが、この対偶の基準は、歌の中の言葉に共通するもののあるのを組合はせてある。たとへば、

つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

主や誰問へど白玉言はなくにさればなべてや哀と思はん

これは恋と雑との対偶であるが、その基準は「白玉」である。同様に、

武士の八十宇治川の網代木にただよふ宗のゆくへ知らずも

忘らるる身を宇治川の中たえてこなたかなたに人も通はず

は、「宇治川」で対偶する。久松潜一先生が、日本文学評論史形態論篇の中で、不審

をたてられてゐる。

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらん

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

の対偶の如きも、右の例から推定すれば、「風」によつて対偶せしめたことになる。また、

風吹けば沖つ白波立田山夜半には君がひとりこゆらむ

あやなくてまたき浮名の立田川渡らでやまむものならなくに

の如きは、「立田山」と「立田川」で対比させてゐる。

右のやうに対偶させる関係上、たとへば、春の歌と秋の歌とが交互に一首おきに列べられてゐるといふ現象が生じてゐる。ところが、春秋の対偶を考慮に入れないで、今、一首おきに春の歌ばかりを順次抜き出してみると、そこに一つの編纂方針といふものが見出せるのである。即ち内容の項目の類別を以て列べられてゐるやうに思へるのである。而もその類別の排列が、古今六帖に近似してゐるのである。たとへば、その最も顕著な例は、桜の歌である。

さくら花咲きにけらしな足ひきの山のかひより見ゆる白雲

みよし野の山べにさけるさくら花しら雲とのみあやまたれつつ

山高み雲ゐにみゆるさくら花心の行きて折らぬ日ぞなき

山ざくらわが見にくれば春かすみみねにも尾にも立ちかくしつつ

みてのみや人にかたらん山さくら手ことに折りて家つとにせん

見る人もなき山里のさくら花ほかの散りなん後ぞさかまし

新撰和歌では右の如き順序で、その間に秋の歌を一首づつ差しはさみながら並んでゐるのであるが、右六首は「山ざくら」といふ類項を以て集め並べられてゐることは明らかである。元来新撰和歌は、古今集の歌を二百八十一首も含んでをり、また、賀哀、別旅の二巻などでは、その歌の排列順序が古今集でこれらの歌が出てくる順序になつてゐる等、古今集と深い関係にあるものの如く思へるのであるが、右の六首の場合は古今集の排列基準とは違つてゐる。すなはち、古今集では、「山高み」の歌は賀の部に属してゐるし、その他の歌も違つた標準で分類されて春上の部の各所にばらばらに散在してゐるのであるが、新撰和歌では「山さくら」といふ基準項目に一括されたと考へられる。ところで、この「山高み」の歌は古今六帖では「山桜」の題名下に分類排列せられてゐる。新撰和歌の列べ方は古今六帖風なのである。

思ふとも恋ふとも逢はむものなれや結ふてもたゆく解くる下紐

思ひやる心や行きて人知れず君が下紐解きわたるらむ

あひ見ぬも憂きも我身の唐衣思ひしらずも解くる下紐

これは新撰和歌の恋雑の中の恋の歌ばかりを順次にとりあげたのであるが、古今集では、「思ふとも恋ふとも」の歌は巻十一、「あひ見ぬも憂きも」の歌は巻十五にあり、「思ひやる心は」の歌は存在しないのであるが、新撰和歌では「紐」といふ類別でこの三首を同一個所に並べたのであらう。古今六帖にも「紐」といふ題名がある。

千早振賀茂の社のゆふたすき一日も君をかけぬ日ぞなき(古今では恋一)

久しくもなりにけるかな住の江の松は千歳のものにぞありける(古今では恋五)

恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな(古今恋一)

三輪の山いかに待ち見む年経ともたづぬる人もあらじと思へば(古今恋五)

右は恋雑の内、雑の歌を一首おきに除いて接続する四首だが、この四首は一括して、神とか社とかいふ項目で類別出来るであらう。「千早振」の歌は古今六帖では「社」の題名下にある。

桜の歌のほかにも、かういふ風に、類別排列のあとは、いたる所に指摘出来るのであるが、その類別標準は古今六帖と頗る似てゐるといふことが出来るのである。さういふ点では、古今集とは違つてゐるのであつて、新撰和歌は六帖風な類題的編集手法をとつてゐると断言して差支へなからう。

新撰和歌が六帖的手法をとつてゐることの例証としては、なお次のやうなことがある。たとへば、

蟬の声聞けば悲しな夏衣うすくや人のならむと思へば

といふ歌は新撰和歌では夏に部類してゐるが、古今集では恋四に入れられてゐる。内容から言へば当然恋の歌であるべきだが、これを夏の歌と見るのは、六帖的な見方なのであつて、古今六帖には、この歌は「蟬」といふ題になつてゐる。かういふ例がまたすくなくないのである。

忘られば時しのべとぞ浜千鳥ゆくへもしらぬあとをとどむる

ほのぼのと明石の浦のあさ霧に島かくゆく舟をしぞ思ふ

あふ坂のあらしの風のさむければ行くへもしらずわびつつぞゆく

この三首などは一見したところ前述の類題別排列にあてはまらぬやうにも思へるけれども、よく考へてみれば、これは「行くへもしらず」といふ点で統括せられるのである。

さて、次に注目せらるべきは、新撰和歌三百六十首中、古今集に出てゐない歌は、ほぼ集中して、各部の終りに近いところに出てゐることである。たとへば、春秋の部の終りのところに纏つて古今集にない歌が出てゐるのである。夏冬の場合も同様である。このやうに、古今集にない歌は新撰和歌の中に於ては集中的に集つてゐて、まんべんなく散在してゐるのではない。そして、その在りどころが原則的にその部の終り近くにある。右のやうな点から、次のやうなことが推測せられる。すなはち、新撰和歌の編者は、古今集から第一に歌を抜いておき、それを排列していつて古今集の歌だけで足りなくなると、適宜、六帖その他の集から歌を抜いたのではないか、と。

かういふやうな操作と共に、他方では、さきに述べた如く、一首おきの歌と歌との脈絡を考へ、また隣接させる歌の対偶にも心を配り、そして、この集が出来上つたのであつた。

以上、調査ノートをここに提示して、以て、新撰和歌の編集意識の特殊相を問題にしてみたのである。この事実の上に立つて更にこの集の編纂者や編纂年代やまたその撰集意識の問題を考へようと思ふ。

―― 大阪大学大学院学生 ――